

工卜4041

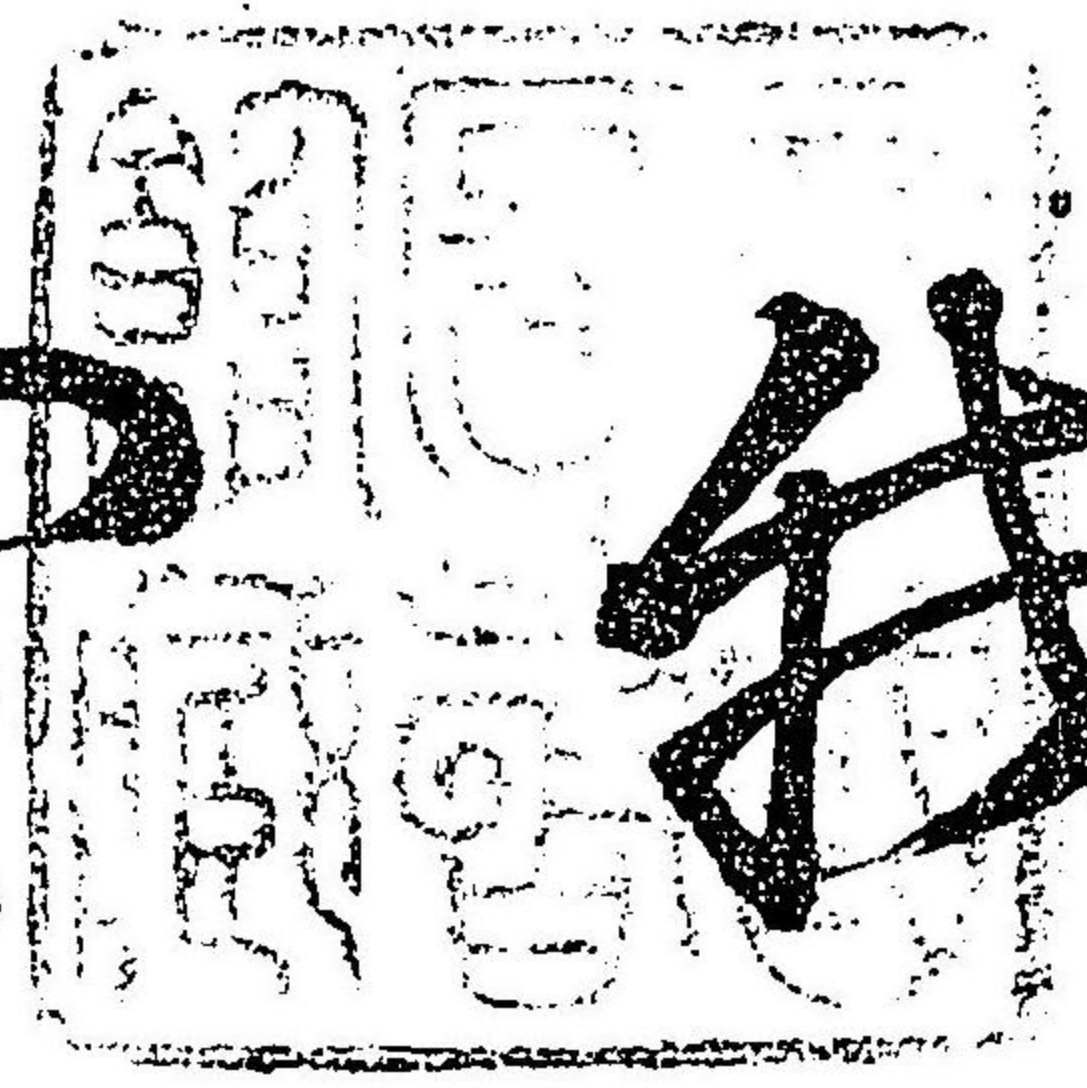
824
256

蓮華阿闍黎日持上人

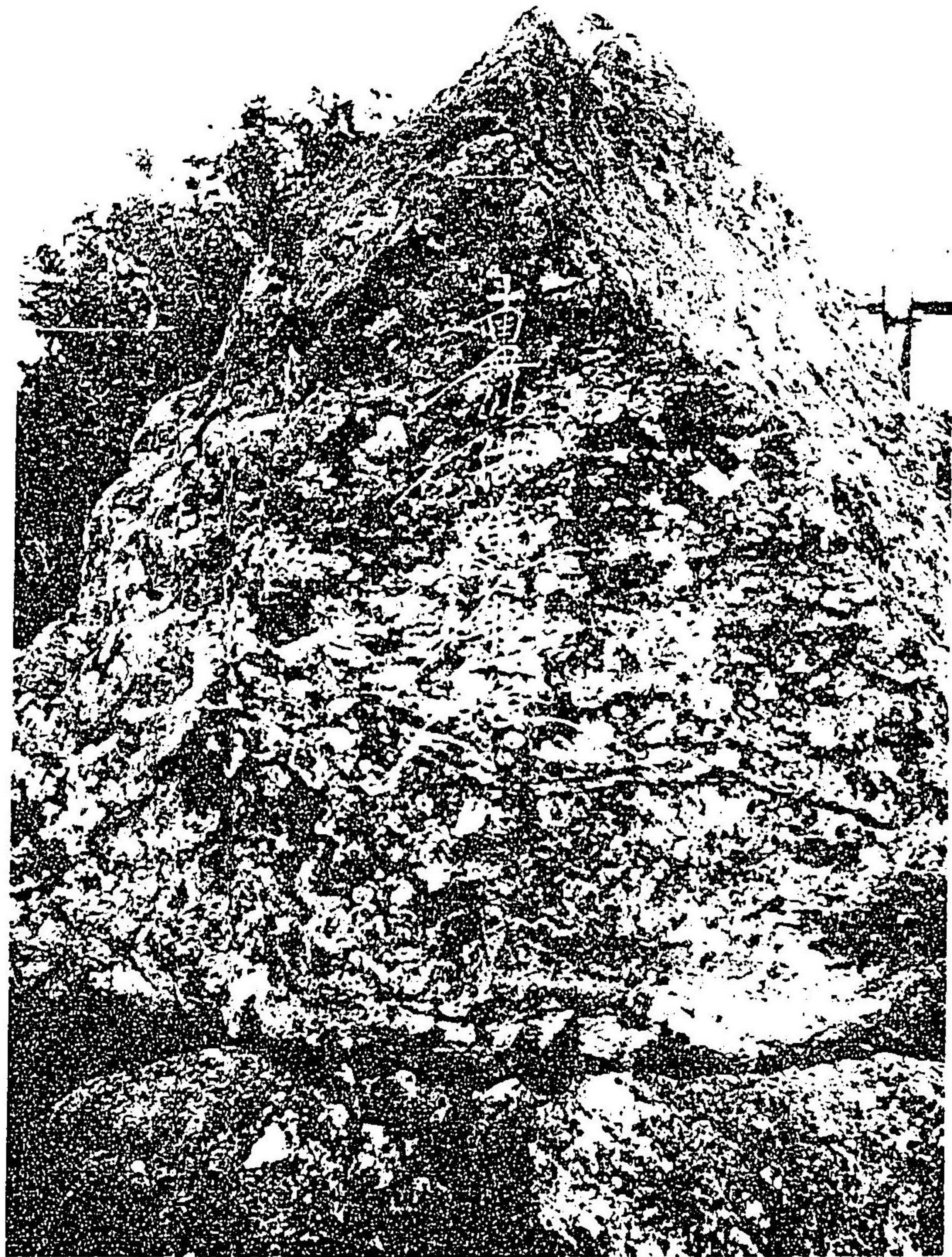
全

324 - 256

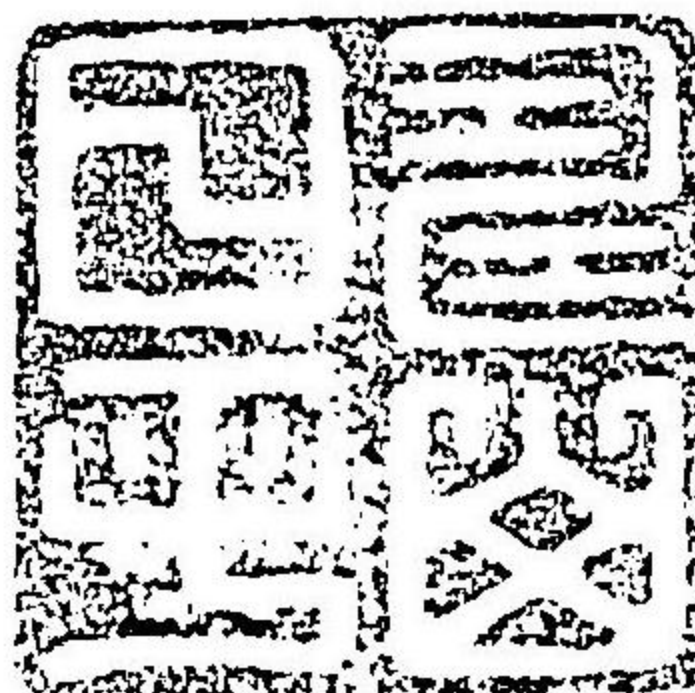
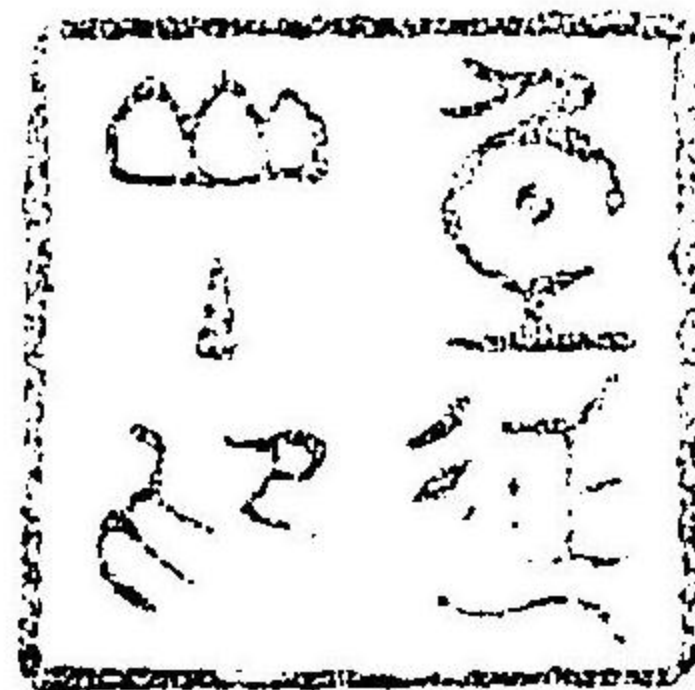
我
玩
藝
報
子
揚
妙
法



明給
44. 7. 21
丙交



途首の敷布時しひ給し陸上に館函が人上持日は岡上
西の館函てしに題首の筆眞しひ給し題に石岩し祝を
と石經御石日題りあに上の丘小るな後の寺行實隅南
ぶ呼もと石冠鶴て以をるた似に冠鶴の形の石又し稱



持日上人の語
石冠鶴

言三之相以據外獲而可別者為
 相性以據由自介不改者為體
 主質名為體功能為力梅造
 為作智用為因和用為緣智
 果為果報果為報和相為本後
 能為末所以知處為究竟者
 又究竟者中之究竟即是實相
 者等如云

水信二甲二月



北海道渡島國龜田郡龜澤村石崎應
 (詳未者作及代年)像木人上持日置安寺

玄二云。相以據外。覽而可別。名爲相。性
 以據內。自分不改。名爲性。主質名爲體。
 功能爲力。構造爲作。習因爲因。助因爲
 緣。習果爲果。報果爲報。初相爲本。後報
 爲末。所歸趣處。爲究竟等。夫究竟者。中
 乃究竟。即是實相爲等也。文

永仁甲午二月 日

日持華押

蓮華阿闍黎日持上人

目次

- 緒言
第一 誕生
第二 遊學
第三 邂逅
第四 「獅子窟」
第五 醍醐谷
第六 大志

第七 告別式
 第八 蝦夷松前
 第九 蒙古
 餘 論

目次畢

蓮華阿闍黎日持上人

緒言

法華經第七は、我が滅度の後、後の五百歳の中に、闍浮提の内に
 廣宣流布して、斷絶せしむることなからしめむ。……月は西より出
 て、東を照らし、日は東より出て、西を照らす、佛法もまた是の如し、正
 像の如し、東に向ひ、末法には東より西に行く。……初め西より
 傳ふ、猶、月の生ずるが如し。今復、東より返る。猶、日の昇るが如し。
 ……淺きを去つて深きに就くは、丈夫の心なり。天臺大師は、釋迦
 に信順し、法華宗を助けて、震旦に敷揚し、叡山の一家は、天臺に相承け、
 法華經を助けて、日本に弘通す、安州の日蓮は、三師に相承し、法華宗を

助けて、末法閻浮提に流通す。……………(日蓮上人「顯佛未來記」)

二

往昔釋迦牟尼佛は、中印度迦毘羅衛城の淨飯王といふ王の家にお生まれなされ、名をば悉達多と命けられて、太子として榮耀榮華を盡されたが、人間世界の有様たとへば、生れる、年を取る、病ふ、死ぬる。まことに人間一生は、つまらぬ有様であるのを御覽なされ、心に非常な不安を抱かれ、どうか之を解決して見たいと思はれ、又出来るなら、永遠の生命を見出して、多くの人々を救ひあげてやりたい、又、此世の精神的改造をもして見たいと思はれた。それで、當時の仕方によつて出家の身とならうと思はれ、十九の歳の或夜、ひそかに、妻子や眷屬を打捨て、王宮を逃れ出でられ、雪山その他に於いて、色々の人々につき、色々に苦行せられたこと、前後十二年。終に奮宗教とは違つた、新しき、力ある大信仰を得られ、

これによりて、自らも益修養せられ、人をも導き教へられた。それが殆んど五十年で、その間、父の王、もとの夫人、一門眷屬より、多くの四種姓の人々の歸向信伏するものが、非常に澤山あつた。諸處方々を説法してあるかれ、御年八十の時、跋提河の畔、拘尸那揭羅の、沙羅双樹の間で没くなられた。(入滅處ともいふ)支那周の敬王の三十五年我が國紀元一七六年である。此の間の説法を、後々になつてお弟子達が集められた。それが一代藏經とも一切經ともいはれてある。初は印度の語で記されてあつたのだが、支那に渡つた時、支那の語に翻譯された。日本に傳はつた時には、支那のまゝで、別に日本語になほさなかつた。

釋迦牟尼佛が没くなられてから、お弟子達はその信仰を、四方に宣傳し、従つて色々の學派も起つて來た。色々立派な學者も澤山出た。その後、支那後漢の明帝の永平十年、皇紀七二七に、始めて支那に傳はつた

三

その後、三國魏晉六朝の頃になると、佛教は益々盛なり、印度西域の高僧方も澤山來られたし、支那から先方へ、求經求法に行くものもあつた。菩提達摩と梁の武帝との問答も、此の時代の話である。道安、惠遠、曇鸞等の諸法師もみな六朝時代である。智者大師と讃められた智顛禪師は隋煬帝時に晉王たり名は廣の保護によつて、浙江省臺州天臺縣の、天臺山に國清寺を創して、惠文、惠思兩師を承述して、此に「法華最第一」の眞法門如來出世の本懷を説示せられた。これが即ち天臺法華宗の開祖といはれるのである。隋開皇十七、皇紀一二五七。この宗風は智者大師の滅後、永く支那を風靡してをつた。玄奘三藏や義淨法師だの(唐の初)さて此の外、印度へ求經に行き、又翻譯などに力を盡される人が多くなつた。唐の玄宗帝の頃、眞言の祈禱や咒が盛に行はれた。唐の末になると、佛教は次第に衰へて了まつたが、宋になると、これが儒教の中へ混入

して、その中心内容となる様になつた。佛教の支那で衰へたのに就いては、色々の因縁もあらうが、三武の禍と稱せられるのが最も手ひどかつたのである。それは、魏の太武帝(一一〇五)、周の武帝(一一二〇頃)及び唐の武宗(一五〇五)の三人が、非常に佛教をきらつて、最も激烈に寺院僧侶を處分したことで、中にも唐武のは特にひどかつたので、終に立つことも出来ない様になり、支那の佛教は衰滅に歸したので、今日では、最早、殆んど見るべきものはない。

朝鮮も、一時は佛教が盛に行はれたものであつたが、此邦でも時の王に憎まれて、寺は毀され、僧尼は還俗せしめられ、残つた僧徒は王城に入るを禁せられたり、非常に賤劣なる待遇をされたりしたために、今では殆んど見る影もなくなつてを、破落漢の寄合所の觀がある。しかし近來は幾らか直つたかとも思ふ。

日本に佛教の傳はつたのは、皇紀一二一二、欽明天皇の十三年である。それ以前に傳はつてをたつたのではあるが、公然と政府から政府へ來たのは此の時である。これは百濟の國王の聖明王といふ人が、毎年奉る年貢と共に奉つたので、その品は、佛像、經論、幡蓋等であつた。佛像は此の五六年以前に作つた金銅の像で、日本天皇陛下のために、及び一切衆生のためにといふ願文がある。その傳來の時には、一寸騒動があつたが、その後聖德太子を始め、皇族方の中で崇拜するものが出來、佛教は段々盛になる。聖德太子は、佛教與隆の元祖である。孝德天武を経て聖武天皇に至ると、崇信特に厚く、三寶奴といはれたとか申すことである。光明皇后も亦甚だ御熱信であられた。國分寺、國分尼寺の創立、僧尼の得度、奈良の大佛の建造、その他佛寺の造營等、實に盛なことであつた。又高麗、支那、印度等の外國からも澤山の僧侶が來て、佛教の宣傳に従事

せられた。此方からは入唐して佛教其他の學問を學ぶものがある。遣唐留學生、或は學問僧といつた。佛教の方で用ゐてゐた音樂が、終に今の宮中の音樂となつてをるなど、おもしろいこともある。これは奈良朝時代の話である。(三韓から佛經佛像を献じたことは、度々の事である。聖德太子は一二五三年より一二八一年まで推古帝の攝政を勤めておられた。一二八一年薨。國分寺を造らせられたのは、聖武帝の天平十三、一四〇一年。大佛造立、天子受戒は、天平十八、一四〇六年) 平安朝時代になると、桓武帝の延暦七、皇紀一四四八年、傳教大師が叡山に延暦寺を立てて、天台法華宗を弘められる。嵯峨帝の弘仁七年、一四七六年、弘法大師は、高野山を開かれて、日本真言の開祖となり、盛に新羅佛教を唱導された。傳教大師名は最澄、弘法大師名は空海、共に入唐學問されたのである。傳教大師の滅後、叡山の人々は、高野山真言の宗

義を取入れて、頗る妙なことになつてしまつた。そして、祈禱と迷信の鼓吹とによつて、平安朝佛教は腐敗してしまつて、僧徒の悪行は甚しかつたので、彼の有名な、後白河法皇をして、鴨川の水、双陸の采、山法師と嘆せしむるに至つた。平安朝は、只僧徒が腐つたばかりではない、政權相門に歸し、人心歸一する所なく、不徳亂倫、社會は暗黒となり、優柔懦弱、女文學の下卑たもののみ流行し、貴族は腐敗し切つたのである。腐敗墮落その極に達して、武家が政治上に容喙する様になつて、平安朝は愈末期になる。保元平治以後、武家は段々勢力を得て、遂に清盛となる。平清盛は武家執柄の元祖である。平家と勢力を争つた源氏は、平氏の衰へかけたのを見、奮起して遂に之を滅し、源頼朝の鎌倉幕府創立となる。そして、頼朝は天下の政權を掌握してしまつたのである。しかし源氏もすく亡びて、北條氏となる。承久の亂を経て北條氏の基礎は益固く

なつた、當時の公卿方の盛衰、平氏源氏北條氏の興廢は、實に一部の寫實小説で、所謂悲感佛教のよき材料である。此に於いて平安末期當時一般の信仰状態は、神佛に祈つて、此の世の苦痛を免れやうとする利己的迷信信仰と、欣求淨土厭離穢土、早くこの世を捨て去りたいといふ、依頼的悲哀的信仰とのみである。立派な法華經といふものがありながら、只迷信の鼓吹に用ゐられるだけであつたのも情ないことである。さて、平安の公卿文明、女流文明が滅びて、鎌倉の武士文明が起る。鎌倉は餘程、素樸な、簡單な、眞面目で剛健な調子が見える。世の有様の大變革に伴つて、文明的產物も、違つた色合を有つて來るものであるが、此に新しい文物制度、新しい信仰、新しい宗教が起らざるを得なかつた。これは社會の大勢の然らしむる所である。

今までの宗教は、神佛に計り諂つて、僅に幸福を得やうといふ、無暗に

人ばかり頼りにする、下劣な婦人根性のものであつた。羸弱無力な公卿や婦女子を慰めるだけであつた。鎌倉になると、勢、武士を相手とする剛健のものでなければならぬ。他には頼らず、自己をば自己で處分する底のものでなければならなくなつた。そこで眞言や天臺やは滅びて、禪宗が盛になつた。しかし、平安の餘流を受けて、悲哀、特に人間の弱點をつけこむ念佛宗も盛であつた。天臺は學問が高尙であるために、無學な武士には、あまり向かないのである。念佛は、「一念彌陀佛、則往安樂國」で、所謂易行道であるから、禪宗よりも一層無學のものには入り易かつた。しかし、善惡はさておいて、どの宗も、相當に學問修養を積むことが必要であつたので、是非共、一度は比叡山か、三井寺等へ登つて勉強しなければならぬ有様であつた。どの宗も、天臺の教相判釋が土臺になる。

平家滅亡、鎌倉幕府創立（一八四四）の後、三十九年、承久亂の翌年、後堀河天皇の貞應元年（二八八二）日蓮上人は、房州の小湊に生れられた。（法然上人滅後、十一年、親鸞上人滅前、四十一年）上人は最初は眞言の寺へ這入られて、眞言の宗義を學ばれたのであるが、當時の人々のする通り、比叡山に上られた。此所て苦學の暇、南都へも三井寺へも高野へもゆかれた。そして、天臺、眞言の宗義に就いて疑を起され、終に、比叡山の天臺法華宗の腐敗を捨て、高野眞言の腐敗を捨て、又當時の各宗、各信仰の善き處を取つて、之に國家的色彩と、個性的色彩とを加へて、之を大成し、打つて一九となし、此に獨特殊別なる一新宗教——一大信念——を確定せられたのである。此の信念は、無論、法華經中心で、法華經の示す所によりて、自己を支配し、法華經の示す通りに活動せられたのである。それゆゑ、天臺法華宗と別つたために、「日蓮法華宗」とも稱せられるし、又「經宗」

とも稱せらる。當時の諸宗の信仰を以て、邪見偏執だとして、攻撃排斥、殆んど完膚なからしめたのであるが、少しも自分の了簡は雜へないのて、一々法華經その他の經文を以て、證據だてたのである。それ故、その鋒先は實に鋭くつて、如何とも免れるとは出来ないものである。所謂四箇格言——念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊、諸宗無得道、墮地獄之根元、法華獨一成佛——といふ様な豪語も、全く罵詈譏諷ではない、經文に明證がある。

當時、各宗に隨分人傑と思はれる人が多かつたが、日蓮上人は、尤て此等を眼中に置いてゐない、信仰の上から見て、取るに足らぬものと思はれたのであらう。如何なる時代でも、新宗教、新道德、新主義を鼓吹するものが、ひどい迫害を受けるのは當りまへてはあるが、一言一行、一舉手一投足、悉く法華經の信仰で、出來てをつて、直ちにこれを打出したので

あるから、その迫害は甚しかつた様である。特にその『折伏逆化』は、迫害を強からしめた。一體、新主義の確信が直ちに一轉して、舊信仰の攻撃となるのは、當りまへ、常の事て、之がなければ、新主義の價打は何もなし、即ち我宗に『折伏逆化』のある所以で、これが又迫害を強めるのである。

特に當時の宗教者は、當時の社會思潮、愚劣な社會の輿論に、迎合することばかり力めて、決して人を導き世を救ふの狀はなかつた。心あるものは憤慨せずにはをられない。まして陪臣國命を執り、眞の天子は只虚器を擁するのみであつて、彝倫亂れて、武士道のみ獨り盛である。然るに一人の宗教家の、此憤慨すべき有様に、憤激するものはないのである。政治上には、最尊第一の天皇、空しく虚位を擁して、殆んど幽囚に等しく、精神界に於ては、佛出世の本懐、最尊無上の法華經は、『捨閉擲抛』せられて、誰も顧みるものもない。志あるの人、どうして奮起せずをら

れやう。是に於てか、蓮祖上人、宗教界の廓清と、社會の改造と、政治の革弊とを標榜して、起たざるを得なくなつたのである。天に二日なく、地に二王なし、日本國には一天子まします、一切經の中には、法華經を拜す、法華經は、諸經の中の王である。これを捨て、臣下卑賤の將種を拜む、天下こんな愚なことがあらうか。天臺大師の意見を土臺とする日本佛教徒、いづれかこの法華經の大切なことを知らなからう。知つては居る。知つては居るが、邪見偏執から、武家を尊び、天皇様を忘れてゐるのである。中には理窟をつけて、武家を擔ぐ宗教家もある。悪みてもあまりある徒輩である。日蓮上人の痛撃は誠に尤もな次第である。

今日蓮上人は、法華經の使命を果さんがため、佛が此世に出られた本懷を傳へんがために、此の日本に遣はされた一人者である。『吾は法華經なり、吾は本化上行菩薩の再誕なり、吾が言は即ち釋迦牟尼世尊金口

の所説なり。日蓮若し出でずんば、佛語虚妄たらん』とは、常にいはれた所の言葉である。『正法を立て、國家を安んずる』、『佛法と王法と冥合一致せしめて、所謂寂光土を此の國土に實現せしめたい』、これがその常にいはれた所である。正法といふのも、佛法といふのも、共に法華經をさすのであることは、無論である。これを理想的、學理的、若しくは、頭腦中に於いてのみ考へ得るとするのではない。これを現實的に、手足頭目、言語動作の上に、直ちに活現するのである。日蓮上人は、實にこれを仕たのである。即ち所謂『法華經の色讀』である。『色心二法に南無妙法蓮華經と唱へた』のである。實に主義、信仰は全精神、全行爲の支配者である。

已に法華經の使命を果すために遣はされたと、自覺して居られた上人の事であるから、法華經の本文に従つて、この法華經の信仰を、全世界

に普及せしめやうとせられたのである。『閻浮提内廣令流布』『一天四海皆歸妙法末法萬年廣宣流布』かうなつてこそ、法華經の使命が果されるのである。それ故、蓮祖上人の心の中では、日本國已上、他の國々をも教化しやう、としてをられたらうといふことが想像せられる。月氏の佛法は西より東に傳はつた、日本の佛教、日蓮の佛教は、日の東より出て西を照す様に、東海日本より、西方支那、印度に光被しなければならぬと思はれた。御文章中、諸處で伺はれる處である。是の様な抱負、是の様な信仰、是の様な壯圖を抱いたもの、佛滅三千年、日本佛教始まつて以來、いまだかつて、一人半人もなかつたのである。此の如き偉大なる抱負は、上人ならては、逆も有することは出来ないのである。

しかし、日蓮上人の一生は、長くはなかつた。そして色々度々の迫害に、思ふ通りにははたらけなかつた。三十二歳で始めて新信仰を説き

出されてから、六十一歳で没くなられるまで、説法開導、利益功德は、非常に多かつたに違ひないが、惜哉、鎌倉を中心として、西は甲斐位までしか亘らなかつた。京都の方には、布教の跡が及ばなかつた。そこで、京都中心の弘通は、法孫日像上人に委せられることになつた。その後、日像上人は、大に京都地方に、法華經の光を輝かされた。今も京都には立派な日蓮宗の御寺が澤山ある次第である。

所が、日本以外の布教、所謂海外布教の方は、何等看手する所もなかつたのであるが、此の、日蓮上人の理想を受け續いて、之を實現し實行した人が一人ある。これが、本籍でその傳を紹介しやうとする、蓮華阿闍梨日持上人である。日持上人は、祖上人の御弟子達の中でも、年は若く、入門も遅かつたが、六人の中に數へられる程の人である。此の人は、出羽奥州の方、祖上人の足跡の至らなかつた所を始め、蝦夷、松前、域外の地、蒙

古にも渡つて、日本の佛教を、西土に傳へる端緒を開かうとなされたのである。實に偉大な事業をなされた人である。

一體、佛教が我が國に傳はつてより以來、入唐入宋して學問修行した人々は澤山ある。信仰や佛書を買受けたり、盜だりした僧侶は澤山ある。又、態々彼の地から、その宗とする所を弘めやうと渡つて來たものも、随分ある。けれども、最も穩健である信仰を打ち立て、之をあべこべに、先方へ宣傳し返さうとした人は、日持上人以外、恐らく澤山はあらずまい。そしてその公然と言出した所の抱負を、實際の事實として示し得たものは、蓮華阿闍黎上人の外、一人もあるまいと思はれる。實に蓮華阿闍黎上人は、日本の海外布教の嚆矢者であつて、日本の佛法を以て、外人を教化した第一最初の人であつて、つまり日本の國光を海外に宣揚した張本人である。そして、これは、交通も驛傳も、何もかも、少しも整

つてをらなかつた鎌倉の時代、今より六百年以前のことである。六百年以前の海外布教者、六百年以前の國光宣揚者、壯烈ではないか。雄偉ではないか。胸も躍り筆も震ふ次第である。

宗教は人生の生命である。宗教は國家の根柢である。基礎なき樓閣は慣れ易く、根柢なき國家は永持がせぬ。若しも、永遠の生命を欲するなら、早く宗教に來らねばならぬ、朝鮮は終に我が帝國の一部となり、朝鮮民族は日本民族の同胞となつた。朝鮮民族の開發は、我等日本國民の責任である。今や、我が帝國は、世界の一等國として世界から扱はれる様になつた。將來の日本は、孤立的、島國的ではない。大陸的、連繫的になつて、その一舉一動は、直ちに世界に大影響を及ぼすのである。人民各個人も常に此の心掛を忘れてはならぬ。進んで、世界の平和、人類の幸福といふことに、目をつけてゆかねばならぬ。て、差し當り、朝鮮

民族を正しき信仰で開發することは、目前の急務である。聞く所によれば、朝鮮は我が日持上人が六百年已前に、開發踏査せられた所であるといふ。して見ると、我が宗に取つて、朝鮮は、古き因縁があるといはねばならぬ。て、我等日蓮門下のものは、朝鮮開發の上に特に大なる責任があると思ふ。宗門の人々が、朝鮮へ開教するために、日持上人の遺蹟たる、駿州貞松山蓮永寺を移さうとしてをるのは、誠に尤とな次第である。願はくば早く其の良果を結ぶのを見たいものである。日持上人の傳をかくに方り、六百年前と六百年後とを考へ合せて見て、はからず、感慨が起つて來たのである。

第一 誕生

山紫水明の地、能く寛厚溫雅の人を生じ、大山巨嶽の下、能く豪宕卓犖

の士を出す、海邊に育つたものは、多く氣象快濶、山地に育つたものは、その品性多くは崇高、四周の風物は、よく人の性に影響し、陶冶し鍛錬するのである。吾が日持上人が海外弘通の雄志を懷かれたのも、勿論其の天稟の素質と、日蓮上人の啓發と相待つて、さうなつたには違ひないが、その家系家庭の感化、其の素質を立派に拵へあげた郷土の風物等も、與つて力があつたことと思ふ。

日持上人は、幼名は松千代。駿州庵原郡松野の人。源姓である。祖父は藏人行易と云ふ人で、父上は松野六郎左衛門左金吾といはれたのである。甲州南部氏の支族で、松野の領主で、此處に住まつて居られたのである。左金吾に三人の子があつた。長は家を嗣ぎ、次は女で、同郡上野の南條兵衛七郎に嫁した。(南條氏は日蓮上人の信者となる)第三が即ち日持上人である。母上、或る夜夢に蓮華を見られて、間もなく懐胎

されたので、甚だ不祥事となされて、常に氣にしては面白からず日を送られたが、やがて、建長二年の春、何の不祥もなく、安々と男の子が生れた。成育しゆくにつれて、益々美しき相好をそなへ、面貌正しく、額廣く、眉秀で、鼻筋通り、色も白く、何となく佛菩薩の面影が備はつて來た。これが即ち日持上人である。父上母上は、非常にこれを可愛がられたが、上人は、生れつきおとなしく賢しく、少さい折から、克く父母に事へられた。又殊更に教へられもせぬに、よく兄弟の道を盡されたといふことである。立居振舞、悠々としていかにも大人の様子があり、いかにも沈着いてをり、粗暴なことは少しもせず、又言葉少なく、靜なことを好まれ、學問が好きで、折には寢食を忘られることもあり。咏歌を愛されて、自然の風物を賞せられるなど、甚だ世の常の兒童等とは違つて居られたといふことである。それにつけても、家庭特に胎教のよかつたことを想

像せずには居られぬ。讀んですぐと諧に覺えてしまひ、又詩歌を讀んで能く諷咏し、屢々郷先生を驚かしたといふことである。やがて十二三の頃には、十三經、十七史、諸子百家の書を講じ、其の義を剖判するに、明晰詳細、碩儒をして後へに瞠若たらしめとたせられてある。又書を能くするのみならず、和歌の道にも通じてをられたともいはれてをる。後には、日蓮上人の侍者として、佐渡の國までもお伴申され、代筆、代文、書記の勞を取られ、又自らも一篇の文をかゝれて、祖上人から譽められたとも傳へられてをる。

想ふに、日持上人の文筆の素地は、此の少年の時代に出來上つたものであらう。其の松野の地は、前には蕩々、山岳を撼かす富士の急水、巖石を流して駛り、河を距て、東方眉目の上には、萬仞の玉芙蓉巍然として、天空を摩して居る。八面玲瓏の靈峯、豪宕雄大の靈氣を示し、雪の膚、霞

の衣、朝夕の眺め、自然の秀麗を示し、晨に來り昏に去る、白雲の變幻、自然の妙用を思はしめ、松の籟水の韻、悉く神仙の物でないものはないと悟らしめる。況んや父母の慈愛、兄弟の友于、一門の和樂は、此の自然と相伴うて、神童松千代の天稟を啓發し、終に彼の崇嚴偉大なる壯圖を企つるの素地を作らしめたのである。あはれ朔北蝦夷の冰雪にも萎まず、塞外蒙古の互寒にも枯れず、萬古其の嘉蕪を留めた所の、本化聖池の白蓮華は、此所に、その根をおろし、その芽を出したのである。花を咲かすのはさて何時であらう。

第二 出家

松千代は、夙く神童の譽れ高く、其の器量を賞めそやさぬものはない。父母の鍾愛は益々深く、始めは夢によりて不祥として居られたが、今は

もう、其の不祥とせられたのを後悔してをられる。此上は唯無病息災で、生先も仕合であるやうにと願つて居られたのである。己が子の、閑靜な處を擇んでは、讀書學問に耽つてばかり居るのを見ては、さすが心配にならぬでもない。病氣でも起らねばよいがと、折には心配しあはれたとのとである。しかし、兩親の願としては、通れ文武の道に上達して、末には官位の榮達を獲しめやうと思つて居られたのである。所が、或る時、松千代は佛教の書を讀んで、過去世の因縁とでもいふのであらうか、人間を離れ、生き死にの道を離れて、立派な佛様の様なものになつて見たいといふ願を起された。多くの人の話をも聞き、又自らも見驗ふるに、世の變遷は止め度もなく、昨日見た人も、今日はもうをらぬ。老少長幼の定めなく、毎日の様にどんどん沒くなつてゆくのである。此等の沒くなつた人は、抑も、何れの處へ往くのであらう。人は何故に生

れて来て、何故に病つたり死んだりするのだらう。何處から来て何處へ去るのであるが。その一生涯はまことに幾らもなく、只一夜のかりの宿である。世間の人は名聞利養に狂ひ走つて居る。位は人臣を極め、富は陶朱を壓し得たとしても、只是れ夢の中の榮えである。樂しいことは、何もあるまい。雲となり雨となるといつた昔の王は、たゞ名を聞く許りである。露と消え煙と登つた今の友も、また再びは見られぬのである。富岳の雲は、朝にゐて夕に消え、夕に下りては又飛び散る。春の花は風に散り、秋の紅葉は時雨に染まる、是れ皆常なき世の中の例してある。余、受け難い人身を受け、而も今幸ひに會ひ難い佛法に會う事を得たのは、一眼の龜の、浮木に遭つたよりも幸ひであらう。早く出家を遂げて、此の無常の苦みを脱し、その教の通り、父母六親、一門眷族に、善き果報を得させねばならぬと、いふ風に、深くも思ひ込まれ、終に是れ

を兩親に打明け、出家を許されんことを願はれた。少しは異存もあつたらうが、つまりはその志にまかせやうといふことになつて、愛兒の願は許された。松千代大いに喜び、終に傳手を求めて、叡山に登り、衣をば脱ぎかへ、髪をば剃りこぼち、名をも能登坊真乘と改められた。時に年は十四歳、弘長の三年であつた。(龜山帝、皇紀一九二三)丁度此頃、吾が宗祖大士は、伊豆の流竄を許されて、再び鎌倉に還られ、頻りに説法教化してをられる。

斯くて能登公は、叡山に居らるゝこと八箇年、食の休みも、眠りの暇も惜まれて、冬は雪、夏は笠と、非常に御勉強なされ、従つて學業の進歩も著しく、八宗十宗の教義は勿論、天臺宗の教相觀心、大切な法門、極めて微細な點、大切の奥義までも、よくよく學び究め、今や、口傳相承をも受くる様になつて來たのである。ところが、不圖、今學んでをる教義に就いて、大

なる疑の雲が捲き立つて涌き出して來た。それは、法華大日勝劣論ともいふべきもので、即ち所謂『理同事勝』の説である。一體、天臺大師、傳教大師等の祖師達は、法華經を以て宗旨とせられ、經の明文によつて『法華最第一』とせられたのである。然るに、慈覺大師、智證大師達は、『法華經大日經は、理に於いては同じであるが、その事相印契や眞言を唱へるところから見れば、大日經の方が、遙かに法華經よりも勝れて居る』と説かれたのである。これは、無論祖師天臺傳教の説とは相違して居るのであるが、今の所では、皆此の説でなければならぬことになつてをる。どうも經の本意や祖師の本意に背いてをるのではないかと思はれる。自分の傳家の瑞寶を捨て、他の窃盜者を拜む様なものではないかと思はれる。天臺傳教等の祖師達に従ふべきであらうか、慈覺智證等に従ふべきであらうか。今の多くの人々(僧侶達)を見れば、祖師の本意を實

踐躬行しやうとはしないで、空しく眞言の邪念空想に耽つて、自分の大責任を忘れてをるのではあるまいか。どうしても今の天臺宗の教義にも實際にも満足することが出來ない。併しまづ人の意見も聞いて見ねばならぬと、其の頃の學頭に質問もして見た。けれど、どうも判然たる説明は與へてくれない。反つてわが疑を増す様なことになる。さては、學頭の學力、信仰、心事までが疑はしくなつて來て、非常に悶々の情に堪へられなくなつて來た。度々質問もし、度々反省もし、色々仕ては見たものゝ、どうも、甘く信服するわけにはゆかぬ。どうも、自分の本心にないことを、さもあるらしく粧ふわけに行かぬ。理窟にあはぬとを信仰するわけにゆかぬ。心にも無い信仰に屈従することは、罪惡ではないかとまで思はれた。しかし、さすがに、思慮深い能登公のことであるから、何時でも、經文、祖釋によつて、深く考へなほされた。『摩訶止觀』

の中には、佛道の修行に三箇條の障礙のあることが説かれてある。自己を疑ふのが是れ一、師を疑ふのが是れ二、法を疑ふのが是れ三。此の中の一つでもあるならその罪は免れることは出来ぬとある。して見ると、吾は既に魔の障りに礙げられてをるのであるまいか。法をも疑ひ、師をも疑ひ、また自己の材器までも疑つてをる。冥きより冥きに入り、終に得脱の光りに逢ふことが出来ぬのであらう。然しながら、矢張り、今の天臺は、心底から信じ、安心することは出来ぬ。一層のこと、今迄の學問は皆やめ、修行もよして、故郷へ歸つて家の業に従はう。そして、佛祖の冥護を得ることがあつて、若し解決を得ることがあらば、非常な仕合せである。斯様に覺悟を定めて、遂に叡山を出て、郷里松野に還つてしまはれた。しかし、暫くの間は、全く世間と離れて、沈思黙想に耽つて、再び疑に捕はれた。一層のこと、断然と舊信仰を捨て、新信仰に移

つて、在俗の身にならうか、はた、儂りてはあるが、天臺の舊信仰に従つて、出家の身ををらうか、捨てやうか、捨てまいか、取らうか、取るまいかと、色々に思はれた。誰に話さうことも出来ず、之を解くべき手段もなく、讀書をもやめ、一室に閉ぢ籠り、煩悶に煩悶を重ね、鬱々悒々として日を送られた。此の時、上人は二十一歳、龜山天皇の文永七年、宗祖上人龍口法難の前年であつた。

第三 邂逅

父母の鍾愛、一郷の譽れ、同族の慈みを打ち捨て、叡山の緇林に入つた能登公は、願はくば、三界流轉の絆を断ち、心には朗然と三觀の月を澄ましめ、父母六親の冥福をも助けたいものと思つたのであつたが、送り迎へた山の八年、唯疑團、煩悶を得たゞけてある。父母の慈悲も、此の悶

えを解く事は出来ぬ。學頭學師も此の疑問を氷解せしむるとが出来なかつた。天地の間に誰れも助けになるものはない。其の上年々の凶變、飢饉疫癘、天妖地異、四時順序を失ひ、日月も光りがない。飢渴の聲は巷に滿ち、餓殍は道に横はつてをる。此の有様を見ては、志あるもの立たすには居られない。能登公の胸中は果して廢什であつたらう。昔は詩歌諷咏の相手となつた芙蓉の靈峯も、富士の激流も、少しも慰みにはならない。たい心の苦痛を増すだけである。白雲碧濤、松影竹韻、照る月も、匂へる花も、少しも面白くない。たい悲哀の感じを強くするばかりである。憂悶の情、道るに所なく、氣はくぢけ、顔色は憔悴し、形容は枯槁して、深く失望懷疑の淵に沈んでしまはれたのであつた。所が、或る日の寧、富士川の彼方、岩本村の實相寺といふに詣てられた。此の寺は、叡山の横川に臨し、曾ては後鳥羽天皇の御祈願所であつた、由緒あ

る寺である。七堂伽藍、雲に聳え、軒を連ね、朱欄碧瓦は、茂れる森に輝きあつて、まことに貴き御寺である。中にも經藏は、智證大師入唐の時、持ち歸られた一切藏經を、収められてあるのである。智證大師は、二部持ち歸られて、一部は三井寺に、一部は此の山に収められたのである。然るに三井寺の方は、治承年中、兵燹の爲めに焼け失せ、今は唯此の寺に一部あるのみである。随つて若し開藏するには、必ず此寺に來なければならぬのである。宗祖大士が、安國論製作の爲めに、此所に入藏せられたのも、全く是れが爲めである。

能登公は、直ちに此寺の學頭智海僧都に面會を求めた。此の僧都は、學名一時に響き渡つた人である。能登公は、まづその胸間に潜める疑問を語り、切に其の解決を求められた。僧都は之を聞いて、大いに同情せられ、其の學解を賞し、其の卓見を歎められた。

「師の煩悶は、大人傑でなければ解決する事は出来まい。自分も先に此の疑を抱いて居つたが、先頃正元元年、日蓮といふ人が、此所に入藏せられたが、その隠藏の暇々に『摩訶止観』の講を願つたことがある。その時、自分の疑は、すっかり氷釋してしまつた、今は安心決定してをる。その時、蓮公は、樂説無礙辯を振つて、止観の奥義を説かれ、天臺妙樂、傳教大師の教旨より、慈覺、智證兩大師の説まで、細釋詳解、縦横無碍に説き明かされた。その上、而強毒之の説、末法本化別付屬の微意、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、津國賊等の宣言、佛陀の四辯八音も、斯くやと思はれたのであつた。預り聞いて、忽ち衣を改めて、その弟子となつたものもある。われは又、吾が學徒、沙彌、伯耆房を勸めて入門せしめた。今は名を日興と改め、心よく隨從して居るとの事。貴師の疑義も、蓮公でなくては、とても解決して、安心を與ふることは出来まい。」

蓮公は、今鎌倉で法を弘めて居られる。早く彼の地へ行つて、疑雲を拂はれたまへ、必ず、己心の明月の煌々たる光を得られるであらう』と話された。此の懇な智海僧都の言葉に、能登公は始めて一縷の光明を見出され、大いに喜ばれ、いそいそと家に歸られた。智海僧都の許を辭して、門を出ると、日は何時しか西に没し、夕靄が田の面を籠めてをる。森の上には、宵の明星が、燦々として光を放つて居た。

因に記す、智海僧都は、後に宗祖に歸して、名を日源と改められた。此の日源師の教化に依つて、松野六郎左衛門は、邪宗を轉じて、宗祖の門に入り、戴髮の弟子となつて、恭敬供給、至れり盡せりであつた。此の事は、松野殿御返事御書(縮遺一五二二頁)に依つて、明かに伺はれる。

第四 『獅子窟』

三六

能登公は、岩本の學頭智海僧都に會ひ、こゝに一道の光明を認め、家に歸りても、暗れた面影、澄んだ眸、言語振舞の、何時に似ぬ勇ましさ、兩親も、愁ひの眉を開かれて、一家は忽ち、一陽來復。公は嬉しげに、今日の智海僧都との話を物語り、明日は早速、鎌倉に上りたいと願はれた。兩親もその願を許されたので、其の夜は、兎や角と、用意を整へ、三更漸く伏床に入られた。

是れより前、日蓮上人は、後深草天皇の御宇、神武天皇即位紀元一九一三年(西紀一二五三年)建長五年四月廿八日早朝、房州清澄山旭の森の頂上に立つて、大聲南無妙法蓮華經と唱へ出され、本化妙宗建立の儀式を

調へられた。其の年鎌倉に來られ、居を松葉ヶ谷に定め、毎日毎日、往來繁き小町の十字街頭に立つて、所謂辻説法をなされ、刀杖瓦石の雨と下る中に、盛んに毒鼓を鳴らして、佛教各宗の邪偽を責め、社會の腐敗國家の滅亡を慨き、下庶民より、上は文武百僚、權門貴顯、皆邪見の毒に中てられて、法身の慧命を喪失してしまつてをることを論じ、慙ては此の國も滅亡するだらうと痛論せられた。當時鎌倉は、政治上の中央都會であつて、かつ文藝や新宗教の中心地である。従つて、諸宗の高僧碩徳、その多いことは、稻麻竹葦のやうで、その美を競ひ合つてをる有様は、蘭菊桃李、一時に咲き亂れた様である。これにつれて、寺々の説法絶え間もなく、信者も道者も、随分澤山有つたのである。この様な有様である所へ、辻説法で各宗を痛撃、之を聞いた人々、果してどんなであつたらう。或は驚き、或は怒り、或は罵り、或は讚め、或は悔い、或は信仰する。毀譽褒貶、噂

三七

とりどり大變な騒ぎになつたのである。中には、一場の演説に、成る程と我を折つて、すぐと信者となるものもあり、或は、數回の押問答、漸つと得心がいつて、數珠切つて改悔するものもあつた。工藤左近吉隆、四條金吾頼基、進士太郎善春、印東氏一家を始め、池上、富木、波木井の諸族も歸依信向し、やがては又、天臺の碩學、大成辨阿闍梨、日昭上人なども歸向せられ、ついで、日朝、日興、日向、日頂等の御弟子も出來たのである。日を閱みし年を経るにつれ、外護の信徒、給侍の弟子、益多くなつて來る。火に薪木を増し、龍の雨を得た様に、宗祖の勢力は愈々強大となり、三類の強敵漸く顯はれて來た。然るに、正嘉元年二月には、大地震、ついで早魃、五月又大地震。尋いて八月には又大地震があつて、神社佛閣、民屋の破壊するものが非常に多く、山崩れ、地は裂け、青色の火炎、所所より盆き出し、非常に恐ろしい。九月に又地震、今度は、小動止まざる事數十日、

四民職を失つて、飢渴凍餒に苦むもの、數を知らぬ程あつた。翌正元元年には、疫病大に流行し、火災、賊災、其抵止する所を知らず、牛馬は巷に斃れ、骸骨は路に塞がり、此世からの地獄である。一切の衆生を救濟し、此の國土をして三災四劫を離れた、常住の淨土たらしめようとして居られる宗祖日蓮上人は、此の悲惨なる世の有様を見て、何て黙つて居られよう。そこで暫く、小町の辻説法を止めて、單身、駿州岩本に往き、一代藏經を閲て、此の天變地妖の原因を究め、明らめやうとせられた。その結果は即ち、『立正安國論』の製作として現はれた。そこで、これを北條時頼に献じ、邪法の流布を禁じて、正法を弘傳せしめ、天神地祇の怒を和らげて、國土を安穩ならしめ、四海靜謐に、四民をして、其の堵に安んせしめよと、諫め曉されたのであつた。辻説法やら、此の諫曉やらが、基となつて、文應元年八月には、松葉ヶ谷の庵室は焼討の難を蒙り、弘長元年五月

には、伊豆の伊東に流竄せられた。しかし、三年目の弘長三年五月には、赦されて鎌倉に還り、卷土重來の勢を以て、盛に諸宗を折伏して居られた。

さても能登公は、旅路恙なく、鎌倉につかれた。彼の實朝公が「宮柱太しく立て、萬代に今ぞ榮えむかまくらの里」と詠まれた通り、大厦高樓檐を連ね、四民の行通、絡繹として晝夜絶ゆることもなく、百貨の輻湊、眼も眩まん計りである。さすがは政令の出づる所と驚かれた。行きかふ人々の罵り騒ぐのに、聞くともなく耳を傾くれば、或は狂僧日蓮と叫び、或は愚僧の日蓮と笑ひ、或は大膽不敵と嘲けり、或は賣僧山師と嗤ひ、噂とりどりに罵つてをる。丁度今、日蓮上人が辻説法を終へて、松葉ヶ谷に還られた所である。能登公はすぐと松葉ヶ谷の草庵にゆき、柴の

戸を叩いて來意を告げ、御面會が願ひたいと申し出ると、白蓮阿闍梨日興上人が出迎へられた。蛇は自ら蛇を知るの譬の通り、白蓮公は一瞥して、直ちに能登公が並の人間でないことを知られた。その氣高い風采態度、そのはつきりした物の言ひかた、その涼しげにして誠ある眼睛、これは確かに、宗教家として世に立つ伎倆のある、餘程えらい人であらうと思はれた。そこで、此の事を、宗祖上人に申し上げられる。宗祖上人は、すぐに對面なされ、改めて來意を尋ねられた。能登公は、先づ顔を見ればかりて、非常に敬服してしまはれ、此の人なら確に自分の煩悶を解決してくれられるであらうと思はれた。そして先づ、あらあら、今までの疑問の一部始終を申された。すると祖上人は、宗教上信念上の話は、急いでもわかるものではないから、まあ寛々と二三日遊んでをられたらよからうといはれる。さて、祖上人の前を退つて、色々のお弟子方

と話しをされたが、どの人も、どの人も、實に並勝れた人たちであるので、少からず驚かれたといふことである。岩本の智海僧都が、蓮公は當時の人傑で、師匠ともたのむべき人であるといはれたのが、如何にも尊く思はれた。そこで、すぐに入門の禮を整へ、弟子の一人となりて、宗祖に隨從師事することになった。後に能登公は、當時の感じを話されて、

『始めて祖上人に拜面した時には、先その威容徳貌に打たれて、たとへば、佛世尊の前にあるのもかくあらうかと思はれた。又大成辨阿闍梨日昭上人に會つた時には、その嚴重な威容、容易に話しをしかけることが出来なかつた。その外、朗師、向師、頂師等、何れも當時の人傑たちで、實に凜として犯すべからざる様子があつた。て苟に考へた。誠に此所は獅子窟である。うつかり野狐の聲を出したなら、とんてもない目にあつて、或は一口に喰ひ殺されてしまふかも知れない、』

『恐るべし、恐るべしと思つた』

と話されたといふことである。

固より、學問は内外に涉り、智恵は古今に通じ、特に天臺の奥義を極めた能登公であるから、日蓮上人の門弟になつて、その進みかた著しく、忽ちに其の奥の手をも窮め、永年の煩悶も、すつかり氷解することが出来、終に全く得信の人となつた。加ふるに文質彬彬々、詞藻豊富、五上法兄も敬服せられる。祖上人も其の器量を視抜かれて、授戒の式を擧げ、託胎の時の瑞を記して、蓮華阿闍黎日持と名告らしめられた。時は文永七年庚午、正に二十一歳の時である。後に昭朗、興向、頂持と、六老僧の一人に數へられるのである。さて是れから、日蓮門下の一人としての、公の活動が始まるのである。

第五 醍醐谷

能登公は、積年の苦悶已に解決を得て、胸懷自然に開けて、驟雨一過、光風霽月の感じがし、又、寒雲散じて忽ち太陽の温き光に浴した様な心地がして、歎天喜地、踊躍三百の様子である。さて師と頼む上人の熱烈堅確な信仰を以て、獅子奮迅に諸宗を折伏せらるゝ有様や、昭尊者の師の命を嚴守して、常に靜に内治經濟を整へ、かつ諸弟を導かるゝ有様や、朗尊者の、師に事へて孝養至らざるなき有様や、興尊者の敏悟、道儀閑然する所なき、向尊者の行業、徳香道風一切に薰する、頂尊者の精進等を見ては、日持上人も非常に驚かれたのであつた。如何なる人でも、此の法窟に入つては、本化の徳香、其の身に染まざるを得ないのである。況や既に、修養を積まれた日持上人のことであるから、ぢきに長年の弟子の様

になつてしまはれた。さて、翌文永八年、夏大いに旱魃、宗祖田邊の池に雨乞の祈禱の時には、六上足皆従はれた。その九月、宗祖龍の口法難の時は、朗公一人、龍の口に走せ、吾が日持上人は、興向頂の三上兄と共に、辨阿梨昭尊者に侍して、濱土の窮巷に蟄居閉塞して居られた。是れは宗祖が常に弟子極那に向つて、三類の敵陣に向つて突撃し、苦闘惡戰に身を委ねて居れば、不時に如何なる事の起るも計り難い、されば我が身命は保ち難い、設令、吾れ無くなるも、後事は辨阿闍梨に任せてあるから、二陣三陣と打續いて、必ず謗法の強敵を破り、邪法の輩を勦絶せんと覺悟してもらひたい。各々弟子極那は、進退をば我と共にせず、如何なる場合に立至るとも、去就は辨阿闍梨に決しなければならぬとの嚴誠を、垂れられてあつたからである。日昭尊者は、宗祖よりも年長であられた。それ故、特に後事を託されたのである。

さて宗祖上人は龍口の難をも免れられ、十三日には相州依智に送られ、十月十日佐渡へ流竄せられた。佐渡にをらるゝこと四箇年、祖上人の信仰は一轉機を得て益向上發展した。島主本間六郎左衛門尉重連、遠藤左衛門尉爲盛入道等を始め、道俗老若男女の化を蒙つて信者となるもの、頗る多かつた。此の間、六上足は、時時、窃に佐渡へ渡つて、宗祖を訪はれたといふが、日朝上人は日進上人等と宿屋の土牢に捕はれてをり、昭尊者は深く潜んで後事を畫策せられ、興向頂持の四上は、順次渡島せられた。特に日持上人は、文永九年の夏と、同十年の夏とに、渡島せられ、給侍奉公を勵まれ、特に檀信子弟等に遣はさるべき文書の代筆代作をせしめられた。越えて、文永十一年五月、宗祖は赦されて鎌倉に歸へられた。そこで、再び平左衛門尉頼綱に會ひて最後の諫曉をなし、『三千町の良田を寄附し、國家鎮護の祈禱所として、愛染堂を建て、住まはす

べし』といはれたのを、弊履の如く捨て去つて、終に身延に隱退された。持上人は他の法兄と共に、侍奉して身延に入られた。聞法、唱題、自行化他の暇には、六上互に鋤を執り、親ら耕耘して、蔬菜を作り、之を宗祖に奉られた。今も向後身延山に、六老畑と云ふがある、即ち此の舊蹟である。持上人は、かつて佐渡に隨從せられた頃、我が宗門の信仰の大意を書き記して、自分の修行の鏡とせられた。これが即ち『持妙法華問答鈔』である。別に又『聖恩問答鈔』といふのもある。さて或る日のこと、宗祖上人は、此の二書を見出され、その法義の正しきことは勿論、文章がいかにも流麗で、又方あるを御賞めなされ、『たとひ余自ら記するとも、一字も加へることはあるまい』といはれ、又『他日吾が語を結集する様なことがあるならば、是の書を、余が作中に加へるがよい』と、仰せられたといふことである。これを宗門の方では、『印可して聖作に列せしめたまふ』といふ

のである。』日蓮上人御遺文には、持法華問答鈔を、弘長三年の作とし、聖上人の作とすれば、宗祖佐渡に在りし時、特に書かれたとすれば、宗祖がよからうと思ふ。

斯くて、幾度か春花秋月を送り迎へて、弘安五年、宗祖上人六十一歳、偶不例を感せられ、那須温泉に入浴せんと、九月身延山を出立して、十八日池上につかれた。病が重くなり、快復の期なきを悟られ、十月八日、日昭、日朗、日興、日向、日頂諸尊と日持上人とを枕元に召され、その死後の、布教唱導の元帥たるべきことを命せられた。その時、持上人は第六位であつた。(即ち六老僧の名が定つたのである。)かくて十三日、祖上人は、非滅現滅の涅槃に入られた。弟子檀那ども、露ふ袖を絞りもあへず、之を茶毘に付し奉り、御遺言に任せて、塔を身延山に建て、六老輪番て之を守られた。吾が日持上人は、一小院を醍醐谷に營まれ、本應院と名けられた。宗祖が生前の慈愛を偲びては、思はず涙を流し、其慈懷恩徳を謝し

ては、讀經、唱題、四時晝夜絶ゆることがなかつた。死に事ふること、生に事ふるが如く、見る人皆其の孝養の篤きに感せざるはなかつた。今の窪の坊が、その蹟である。

第六 大 志

日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、末法濁世の衆生の闇を滅し玉ふ日蓮大士は、弘安五年十月十三日安詳として大涅槃に入られた。素より三身常住、圓滿具足の、本化大聖であるから、金剛不壞の妙色身は、三世を貫いて遠く十方に亘つて廣く、身を法界に徧して、所作の佛事未だ暫くも廢し給ふ事なきは論を待たぬ。唯徳薄垢重の衆生を感念して之に難遣の想ひ、戀慕の情を發さしめんが爲めに、少時鶴林の夕、不滅の滅を示されたのである。本化六萬恆沙が唱導の主として定められ

た六老僧は、身延山に輪次靈龜を守護し、その當番にあたらぬ時は、自分の居るべき所につて、上求下化、自利利他の二法を行し末法救護の大法、妙法五字の宣傳に勵まれた。即ち大成辨阿闍梨日昭上人は、玉澤妙法華寺に法帷を張り、大國阿闍梨日朗上人は、鎌倉比企ヶ谷池上本門寺に居られ、白蓮阿闍梨日興上人は、富士上野に法幢を揚げ、佐渡阿闍梨日向上人は、藻原に法城を構へ、伊豫阿闍梨日頂上人は、真間に法幡を垂れ、各々順逆二縁の衆生教化に力を致された。吾が蓮華阿闍梨日持上人は、郷里松野にあつて大法弘通に勵まれた、斯くて宗祖の第一周忌を身延に修し、次いで六老僧等池上に會して、宗祖生前の御著作を結集し、著作尺牘百四十餘篇之を、録内御書」と名けた。持上人の「持法華問答鈔」は其の第二十一に編入されてある。此の後、次第に集つたもの二百五十餘篇之を、「録外御書」と云ひ、上人の著作たる「聖愚問答鈔」は、其の第一

に編入されてある。弘安八年波木井日圓上人の議に依り、日向上一人身延の定主となられた後は、五老皆其の化境に安住し、愈祖訓を奉じて、教化益物に力を致された。吾が日持上人は、松野永精寺に留錫せられて、大いに近在の地に法雨を注がれた。此の永精寺と云ふのは、日持上人の父上六良左衛門、弘安の初宗祖に歸し、戴髮の弟子となり、その栖住の地を獻じて、宗祖の留錫を請はれた。宗祖は別に思ふ事ありとて、日持上人に命じて、之に行かしめられた。乃ち此の地に堂宇を築いて、日持上人を開祖となし、永精寺と名けたのであつた。然るに後年荒廢に歸したので、元和四年、紀州侯の萱堂養珠夫人の發願に依り、同國阿部郡沓ヶ谷に移した、即ち今の貞松山蓮永寺である。此の蓮永寺は今日韓合邦の紀念として、朝鮮に移轉するといふことに決つてをる。開祖持上人の御一生と云ひ、蓮永寺の朝鮮移轉と云ひ、其間何らかの因縁があるや

うに思はれる。

日持上人は、松野に居られて、近郷近在を遊化せられた。眞言宗松樹庵主は化を受けて弟子となり、名を日教或は日敬と改めてもらつた。道譽遠近に渡り、鳳音四隣に徧く、風を望んで歸化するもの、漸く多くなり、甲州の人入門して日圓と稱し、尾州の人教を受けて日達の名を得、南總の人又授戒して日進と改めた。其他戴髮の弟子となり、外護の檀越となるもの益加はり、永精の梵刹、日々に隆昌を來した。上人は、此等の門弟子の教養を勵まるゝと同時に、常に一天四海皆歸妙法の祖訓を思ひ、且つ日本の佛法西天に流布すべしとの遺訓を思うて、如何したならば、それを實現することが出来るかと苦心考慮せられたのである。今や關東の天地には、昭朗興向頂の五上足が、各唱導の師として群類を教化して居られる。禁闕を中心として關の西は、朗兄の法子經一塵能く宗

祖臨滅度時の遺誠を擧げ、盛に効を奏せん有様。其外熱烈強信の士、四方に散在して、隨力演説の法益を蒙らせて居る。されば我が六十餘國、悉く醍醐の法雨に潤はんは、近き中であると思はれた。本師日蓮上人は、懇ろに示して仰せられてある。

天竺國をば月氏國と申す、佛の出現し玉ふべき名なり。扶桑國をば日本國と申す。豈に聖人出て給はざらん。月は西より東へ向へり、月氏の佛法東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る、日本の佛法の月氏へ歸るべき瑞相なり。月は明かならず、在世は八年なり。日は光り明月に勝れり、後五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。〔諫曉八幡鈔〕

と仰せられてある。不自惜身命、但惜無上道は、佛陀の金言、身輕法重、死身弘法は宗祖一代の行化である。『我一度本化の門に入り、忝くも六萬恒

沙が一人、唱導の主を命せられた、冥加に餘る此身の幸福。夫れ一劫受生の骨は山よりも高けれども、佛法の爲めにはいまだ一骨をも捨てず。設ひ命を捨て、身を破るとも、生を軽くして此の妙法を弘めねばならぬ。今や内地の布教は已に事足りて居る、閩浮提内廣令流布、一天四海皆歸妙法の糸口として異域の蠻民を教化し、進んで支那、印度にも弘通して見たい。これ佛恩師恩、報謝の一端である。さらば此の身を提げて、まづ蝦夷の地に入り、日の光を輝し、後五百歳の闇を照らし、彼等をして、一味平等の妙法に歸せしめ、宗祖の御遺志の一部を継ぎ奉らう」と、日持上人は、かく思ひ定められた。しかし誰にも話さず、孜孜として檀信徒弟の教養に勵み、靜かに時の至るを待つて居られた。正に是れ圓南の大鵬、九萬の天を搏たんと欲して、垂天の翼を斂めてをる有様である。

第七 告別式

心に雄圖を懷かるゝ日持上人は、讀經唱題、自他二利の暇々には、出羽、奥州、蝦夷、蒙古、朝鮮等の風物、人情、道程、順路の調査に怠りなく、たゞ時機の到來を待つて居られた。世は今、伏見天皇の御宇、永仁二年、宗祖滅後、はや十三年、黄菊白菊のみ、獨り霜に傲りて、其の芳蕪を放ち始めて居る。今日は九月の中の三日、永精寺では、宗祖の十三回忌の法要を営まれたのである。かねて四方に告げ知らせておいたので、集まつて來る參詣の善男善女夥しい。持上人の父君母君は已に亡き數に入られたのであるから、是非もない。家を嗣がれた兄上六良左衛門は、先第一着、ついで近郷近在の武家百姓、日持上人の化に浴したものの、皆集り、本師日蓮上人の恩を報じ、徳を謝するは今日であると、唱題の聲は山に溢れ、谷に

森き渡つた。此の時日持上人は、高座に登り、焼香散華式の如く、説法せられた意味は、宗祖大士御一生の御活動法華經の功德、題目の利益等であるが、聴き居る人々は、皆信心肝に銘じ、歡喜身に充滿した。時に上人の聲を改めていはれるには、

『身不肖なれど、日蓮聖人の遺誠を奉じ、一天四海皆歸妙法の先驅を爲し、宇内統一の端緒を啓かんと、久しく心がけてをつた。且つは國王、父母、本師、道友、一切衆生お互の徳に報い、恩に報いる一端として、此の度、此の一身を捨て、深く北狄野蠻の地に入り、説法開導を試みたく、佛陀の大慈高祖の御徳、妙法の功力によつて、彼の地をして本化の淨土たらしめやうと志したのである。御入滅已來、已に十三年、某は已に四十有餘。二生空しく過ぎて萬劫悔ゆる莫れとは、本師の御垂誠である。内地の事は五法兄がをられるから、心配はない。今の各達

の導師としては、日教上座がある。今や長年の望を果すべき善い機會に出合つたのである。猶豫逡巡すべき時ではない。さらば近々の中に其途に上り、先づ蝦夷松前の地を巡化し、更に大元蒙古の地にも渡りたいと思ふ。再會或は期し難いてあらう。各方はそれぞれ強盛の信力を以て、聖祖の遺教に背かぬ様にしてもらひたい』
理を盡し情を盡した告別の説教、一座皆悄然として、水を打つた様である。

日持上人は、斯く告別の説法をなされ、高座を降りられて後、別室に法弟、日教、日圓、日達、日進の四人、兄君松野六良左衛門を始め、近親の檀信徒を集められ、宗祖の遺誠、我身の覺悟等を巨細に述べ、後々の教訓、異體同心の祖意等を懇ろに諭され、何時出立しても、決して離別を悲んではならぬ、如何なる處で死んでも、決して惜むべきではない、悲むべきではな

いと、繰り返し繰り返し、申渡された。御堂の方では、日も漸々くれかゝるので、それぞれ暇を乞ひ合つて、人々は歸つてしまつた。それにしても、日頃信仰淺からぬ人々たちの、今宵の夢は圓かであつたらうか。

第八 蝦夷松前

斯くて十月十三日には、身延に參詣して、此所での十三回の法要に連り、さて特に祖廟を拜して告別の法味を捧げ奉り、法主日向上人にも永の暇を申して、さて松野に歸られた。明れば永仁三年乙未、正月朔日、元朝の儀式、滞りなくすませ、よき日であるからといふので、すぐと出立といふことになつた。弟子其他の人の驚きは一方ではない。後の事を託されたことも忘れて、四人の弟子、特に日教上座は、何處までも隨ひまゐらせたいと願つたが、はしたないとたしなめられた。集つて來た檀

信ども、せめて今日一日はとおといめ申しあげたが、それさへ肯かれず、供も無用、雜具も無用、法の力と生命とがたよりであるとなつた。一人、一蓋の笠、一本の錫杖、一連の數珠、ふらりと松野を出立なされた。御年は四十有六。さて、度々の往返に思出の多い東海道も、景色を眺める暇もなく、武州、總州の宗祖の遺蹟も、一々拜する暇もなく、直ちに陸奥へと志し、行く行く教化の法雨を注いで、甘露の益を得せしめた。仙臺では、題目を石に書いて、結縁の便りとなされた。今の孝勝寺の題目石がそれである。出羽に入つては、秋田附近の諸所に法輪を轉せられた。今の城外の法華寺、安仁の法華寺等は、其の跡である。尙進んで津輕に行かれた。途中笠松峠で休まれた時、路の傍に大石のあつたのを見て、之に墨黒々と題目の七字を書かれた。墨痕淋漓として後世まで傳はつてをつたが、文化年中、京都本滿寺の浮木日龜師、其の湮滅を恐れて、その

まゝ之を彫刻し、今に巖然と當年の俤を残してをる。これは今の法峠（法峠）の地で、法嶺庵と云ふ御堂がある。進んで、弘前の法立寺、青森の蓮華寺、皆上人遊化の跡で、後年寺となつたのである。六月には、津輕石崎の漁夫、蠣崎甚兵衛と云ふものを使ひ、船に乗つて對岸のウスキ島に渡られた。こゝは今日の函館の地で、今より二百年位前までは、陸を離れた一孤島であつたのである。此所に上陸せられ、山嶺の大石に、七字の題目を認め、鎮護國家の祈禱を修せられた。此石の形が鶏冠に似て居る所から、鶏冠石とも云ひ、又は題目石とも云ふ。其の山の形、牛の臥すに似たりといふので、或は臥牛山とも云ひ、又題目石の鶏冠に似たる所から、鶏冠山とも名けて居る。明治三十一年に、此山一圓陸軍要塞地となり、砲臺の築かるゝに至つて、此の石も移轉することになり、今の實行寺の後方、官林の中に移された。此所は市街を看下して、眺望甚だ佳なる

處である。

日持上人は、更に船を進めて、東南海岸の河口に上陸せられた。今の錢龜村字港の地である。さて此の地から、程遠からぬ所に、少時錫を留められ、近里の山川を跋渉して、アイヌに本化の法を説き示された。檜山郡上の國村、室蘭附近、上川郡、岩内郡等に、上人の舊蹟と稱するものゝ澤山あるのは、皆此の時遊化の蹟である。話はかはるが、甚兵衛一族は、後此の地に移住し、追々續いて來るものも出來てきて、終に一の部落が出來た。そこで、いつとはなしに、地名を石崎村といふやうになつた。此村に今、日持山妙應寺と云ふ寺がある。日持上人が、撰法華の地から、渡唐せらるゝ時、本國から奉持して來られた宗祖の尊像、其他十二體の佛神の木像、一字一石の經石等を埋められ、後生と認め、大石を其上に置き、之を記念として、長途の旅に上られた。其後百五十餘年を経て、時

の領主止苔村の小林太良左衛門良景といふ人が發見して、之を自分の家に奉安して、今の福山法華寺を拵へた。法華寺に安置してある土中出現の宗祖とは、即ち此の御像である。此の時土地の住民は、其の十二體の像を請ひ受け、別に一字の寺を造つて、後生庵と名けた、是れが即ち今の日持山妙應寺である。

名をさくさへも恐ろしいと思はれた蝦夷の地、冬となれば、雪の山に氷の河、狼も居れば、熊も住む。野蠻蒙昧なアイヌの栖處、此の危き所を行く一寒の僧、法衣は已に破れてしまひ、蓑笠もまた敗れてをる。孤錫雙鞋の外、もとより寸鐵をも帶びては居らぬ。裸體も同じ有様である。瘴猛惡獸に等しいアイヌ等の一發の毒矢、一聲の棍棒、若し一度上人の身に觸れるなら、肉は飛び、骨は散つて終つたのであらう。危い哉上人の身、累卵といふ語も尙譬へるに足らぬ。その上最早、冬に近づいて、自

然の寒氣、身も骨も冷徹つてしまつても、暖を取る術はない。飢渴並び迫つても、食を得る便りもない。それでも日持上人は、遊行自在に教益を四方に敷き、少しも身心に障を得なかつた。て、六百年の今日に至るまで、其の餘光の赫々としてをるのを見るのは、全く是れ諸天の守護、晝夜に天の童子が來つて給使したからであらうと思はれる。法華の明文、如來の金言、まことに疑のないことである。上人は勇猛精進、遂に會長のブシヤタといふものを嚮導として、今の檀法華(昔は渡唐法華と書いて、日持上人が此所から渡唐せられたので名けたといふ説がある)の地から一葉の丸木舟に棹して、愈々異域に渡航せられたのである。

第九 蒙古

妙法蓮華經如來神力品に云はく、若は國の中に於ても、若は林の中に

於ても、若は樹の下に於ても、若は僧坊に於ても、若は白衣の舎にても、若は殿堂に在つても、若は山谷曠野にても、此經卷所住の處は、即ち是れ道場なり、諸佛此に於て無上正覺を成じ、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃し玉ふと、虎狼野干の栖處、惡獸毒蛇の窟ても、此の妙法華經の在る所は、皆是れ諸佛の道場、法輪を轉ずる處である。漫々たる太平洋の上、巍々たる山岳の頂、茫々たる原野の中、冥々たる深谷の底、此の法華經を持つ者に取つては、天人舞樂の安穩處である。惡魔々民、夜叉吉遮も其の便りを得る事は出來ぬ。何も疑ひはないのである。吾が蓮華阿闍梨日持上人は、此の經文に任せて、片々たる一葉の舟に乗じて、蝦夷樓法華の地を離れ、先づ樺太に立寄り、それより當時の靺鞨の地に向つて出帆されたのである。法華經には若し大水に漂はされんに忽ちに淺き處を得ん、大海に入つて黒風其の船舫を吹くも、悉く其の難を解

脱する事を得んと説いてある。海上恙なく終に靺鞨の地にはいられたのである。(靺鞨は、今の露領西部利亞沿海州、浦鹽北邊より、黒龍江附近までに住んであつた種族の名である。)

人も知る大元蒙古は、北方支那に蹶起して、西は歐洲大陸を蹂躪し、亞細亞大陸を席卷し、餘勢我が神州を襲うて來た(弘安四年)けれども十萬の軍旅、生還僅かに三人といふ有様であつた。吾が日持上人は、その後十五年、單身孤影、支那本部を中心に、北は滿洲、蒙古の地、南は遼東、韓半島まで、漂浪幾年、南船北馬、一意妙法の弘傳に力められたのである。しかし、その終焉のことは、どうであつたか、少しもわからないのである。あはれ末法萬年の闇を照らすべき、慧日本化の行者、蓮華阿闍梨日持上人は、その信仰を傳へんと努力せられつゝ、終に異疆絕域に、其影を匿してしまはれたのである。

上人の事蹟舊蹟等に就いては、未だ調査が行届いてをらぬ。『行唐縣誌』、『東國輿地勝覽』等の支那の書籍にも、上人が舊蹟であらうと思はれるものが記載されてはあるが、是れも亦信を措く事は出来ぬ。既に先輩の中にも、其の妄を辨せられた人もある。或は豊臣秀吉が朝鮮征伐の當時、明の一將、七字の題目の旗を立て、應援して來たといふので、これ日持上人の遺効だとするものもあるし、或は享保年間、相州三浦の勘右衛門と云ふもの、事あつて清國に入り、持師創立の精舎十八宇あるを見た。其の一を日蓮山法華寺と云ひ、そこに上人の靈塔があつて、五月十八日が命日であるとわかつた、と云ふものもある。或は又、持休山白典寺は持上人開創の精舎で、在世二十九年、四月六日申刻、示寂せられたとあると、彼の地に入つて知つたものもあると云つてもある。更に又、持統山博傳寺を創し、入滅十二月七日と云ふものもある。惟ふに交通

の便もなく、且つ吾が國から支那に渡つて、持上人の遺蹟を探查しやうとした人があつても、當時の幕府では、之を許さず、彼の地から來る人もあまり多からず、かつは北方支那の人の、日本に來るものが稀であつた爲めに、上人が遊行教化の事蹟は、遂に傳はることがなくて、湮滅に歸したものであらう、随つて、其の終焉の年月日さへも、知る事が出來ないのである。それゆへ古來日持上人の忌日を、松野出發の日、即ち永仁三年正月朔日と定めてあるのである。而し同じく松野發足の年月日を、上人の忌日と定めるに就いても、異説は澤山あるが、今は最も普通に唱へられたものに隨ふのである。今日已後、交通の便は益々發達し、學術研究、史學講究も益々發展するであらうから、此の隠れたる偉人の事蹟も、世人の研究する料となり、滿韓弘通の本化門下も、漸く加つて來て、調査探究、益々其の度を進めて、亞細亞大陸の片瓦碎石の中から、如何なる史的材

を得るかも知れぬ。若し吾人の想像がうまく實現して來るなら、數百年來の疑團、忽に氷解し、宗門史上に一異彩を放つのみならず、吾が日本國民の史乘に向つて、赫灼たる光明を與へ、天孫民族に對して、大なる覺醒を與へるであらう。十方の士君子よ、吾等の祖先の中に此の如き偉大なる志望を有し、此の如き壯烈なる企圖を爲した偉男子があり、日本を以て世界を導き、四海歸妙、宇内統一の端緒を、六百年の昔に開かんとし、粉骨碎身、一命を鴻毛の輕きに措き、理想の爲め、道の爲め、國家の爲め、一切衆生の爲めに、勇戦健闘し、終に異域の土と化したといふのを見て、吾等は非常の悦びと、非常の誇りとを禁じ得ないのである。そして又、自ら威奮激勵せずにはをられぬのである。思ふに此の一文を讀まれる士君子も、予と同じ様に、悦びと、誇りと、感激とによつて、必ず胸を躍らされるであらう。

餘論

日持上人一生の行動云爲、悉く吾人に對する教訓でないものはない。其の著書の如きも、固より弄月嘯花の戯文字ではなくて、全く吾曹を警策し、訓誡する經典である。前に述べた『持法華問答鈔』、『聖愚問答鈔』の如きは、共に是れ宗祖日蓮大聖の御遺文として、宗門の寶典として門徒たるもの、朝夕拜讀して居るものである。一字一句、一文一節、みな悉く本化の大教、末法の燈明、群生の指南でないものはないのである。今上人の傳の終結として、其の一兩句を抜いて、以て其の原本に就いて學び、上人の遺教に浴せしむるの端緒ともしやう。

『持法華問答鈔』は、大體釋尊の一代藏經に、淺深高下の説のある事は、人に貴賤の差あると同じ事である。此の法の中に、爾前四十二年の經

教は、權經方便の教で、法華經のみ眞實佛の本懷であるから、是れを受け持つて成佛せねばならぬ事を、問答體に經論疏釋を引證して、論じられたのである。

『聖恩問答鈔』の大意をいへば、或一人の愚者が、世の無常を感じて、佛道修行の大志を懷き、東請南詢、出離生死の法を求め、そこへ、當世の律宗、念佛宗、禪宗、眞言宗、天台宗等の智者が來つて、各其の宗とする所を教へる。愚人は、各賢人の所説の異なるに驚いて、愈々迷霧に閉される。最後に、唱題修行の易行をきいて、これに依つて、成佛の道を得ると云ふ仕組で、謂ゆる聖人と愚人との問答である。一讀三歎、其の筆致の巧妙なのに驚く。宛ら戯曲物語を讀む様で、詩味津々、興趣盡くる所を知らぬ。

『只、須く汝佛にならんと思はば、慢のはたほこをたほし、忿りの杖を捨て、偏へに一乘に歸すべし。』(持法華經問答鈔)

未だ佛教を學ばずして、世間の名聞名利に捕はれ、頼み難き人間の知識を以つて、無限絶對の眞理を臆測し、吾れこそは一切智人と稱して、妄見の網に懸るものは云ふまでもない。偶、佛道に入り、成佛を願ひながら、慢のはたほこいや高く、忿りの鐵杖を振りかざして、權教邪宗に執着するものがある。速かに一乘妙法に歸して、如來の本懷にかなふやうにし、成佛得脱すべきである。『名聞名利は今生の限り、我慢偏執は後生のほだし』である。

法華經は諸佛出世の本懷、衆生成佛の直道ではあるが、しかし、聖道難行、利智達識の士でなくては、得果千中無一だと云ふことが、當時の人々のよくいふところであつた。上人は

『利智精進にして、觀法修行するのみ法華經の機ぞと云つて、無知の人を妨ぐるは當世の學者の所行也。是れ還つて、愚痴邪見の至りたり。』

(同上)

と喝破せられた。

『只得がたきは人身なり、値ひ難きは正法なり。汝早く邪を翻へして正に付き、凡を轉じて聖を證せんと思はば、念佛、眞言、禪、律等を捨て、此の一乗妙典を受持すべし。』(聖愚問答鈔)

此の法華經に歸し、題目を唱ふると云ふ事は、只に自己の安心、自己一人の享樂、自己一人の幸福ではない。一切の神佛諸天の法悦、一切衆生の成佛、現世は安穩に、社會は靜謐に、國家は無難に、世界の平和を來すのである。

『釋迦一佛の悦び給ふのみならず、諸佛出世の本懷なれば、十方三世の諸佛も悦び給ふべし。』我則歡喜諸佛亦然』と説かれたれば、佛の悦び給ふのみならず、神も隨喜し給ふなるべし。……されば七難即

滅、七福即生を祈らんにも此の御經第一なり。現世安隱と見えなればなり。他國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも此妙典に過ぎたるはなし、令百由旬内無諸衰患と説かれたればなり。』(持法華問答鈔) 則ち此の法華經は、人生の無常を感じて、哀傷の涙に暮るゝのではない。無常の人世、董花一片の露、敢果ない人生であるから、時を惜み秒を惜しんで活動せねばならぬ。自界叛逆の難とは、自國の泰平を亂す内亂である。他國侵逼の難とは、外寇である。此の内亂、外寇二者共に無くなつて、人々が精神的に結合するならば、國家社會の靜謐、世界萬國の平和は得らるゝのである。然るに其の國の道義廢頽し、その思想が腐敗するならば、内治も既に得る事が出來ず、外寇忽ち之に次いて來るのである。そこで、世界は修羅の巷と化し終るのである。これが即ち、上人の一切の惡思想を捨て、只一乘に歸し、純潔健全なる法華經の信に歸

入せよと主張せらるゝ所以である。

『須く心を一にして南無妙法蓮華經と、我も唱へ人にも勸めんのみ。』

(持法華問答鈔)

と云はれた眞意は、先づ思想界の統一を爲さざるべからざるを教へられたのである。而して此の思想統一を爲すには、先づ近きより遠きに及ぼさなくてはならぬ。父母、主君、國王等若し惡思想に沈溺して居らるゝなら、是れを第一に諫めねばならぬ。設令親の命、國主の命なりとも、邪正を辨せずして随つてはならぬ。

『是非を辨せず、親の命に随ひ、邪正を簡ばず、主の仰せに順はんと云ふ事、愚痴の前には忠孝に似たれども、賢人の意には不忠不孝是れに過ぐべからず。』(聖愚問答鈔)

是れ宗祖上人が、白刃を踏み、身を湯鑊に投じて、國家を諫曉された所

以てである。其の上足日持上人の思想主張も、また正に是の通りである。

『身をもなげ、命をも捨つべし。諫めてもあきたらず、欺きても限りなし。』(同上)

といはれてあるのを見ても、如何に日持上人が、宗祖の教を遵奉せられたか、いわかるのである。然るに、内地は、已に妙法の光明を被つてをる。日本の佛法即ち日蓮の佛法を、西土に照しかへす務めがある。これを果すのが、わが責任であらう。先づ蝦夷を開化し、次いで濠土、月氏に及ぼし、末法萬年の闇を照さうとせられたので、斯くて身は蠻地に死して、佛日西漸の職に當られたのである。

日持上人滅し玉ひて爰に六百餘年、我大日本帝國は、終に日韓併合の實を擧げた。上人が思想上から統一せられやうとした邦疆は、今や政治的に統一せられたのである。しかし、若しも、永き以前に於いて、幾百

十の日持上人が出て居つたなら、より以前に於いて、より少き力を以て、より大なる疆土を領有することが出来たてはあるまいかと思はれる。今日以後に於いては、新版圖の領有併合は、殆んど望みがない。けれど、健全なる道徳、宗教、教育等の精神的、信仰的事業を以て、全世界を統一することは、最も望みある仕事である。それで、吾々日本國民は、さういふ事をするのに、最も都合のよい位置に立つてをる。東西兩洋の地理上、政治上、思想上の中心となつて、是の兩洋の思想を融合一和するに、法華經の信仰を以てし、理想的新國土を建造し、祖先の遺風を顯揚することは、實に吾等日本國民に取つて、望ある、尊き、愉快かつ壯烈なる大責任、大義務である。

蓮華阿闍黎日持上人畢

蓮華阿闍梨日持上人史傳參考書

- 一、 元祖化導記
- 二、 日蓮聖人注書讀及鈔
- 三、 元祖蓮公薩陞略傳
- 四、 元祖一代曆
- 五、 法華靈場記冠部
- 六、 本化別頭佛祖統記
- 七、 本化別頭高僧傳
- 八、 本化高祖年譜
- 九、 高祖年譜攷異
- 十、 白石遺文

- 十一、鷲の御山
十二、日蓮上人
十三、法華諸國靈場記
十四、日蓮宗祖真實略傳
十五、高祖大士真實錄
十六、日蓮大士真實傳
十七、日蓮大聖人御傳記
十八、日蓮聖人の教義
十九、大日本人名辭書
二十、日本佛家人名辭書
二十一、北條九代記
二十二、鎌倉顯晦錄

- 二十三、圖大曆
二十四、古今著聞
二十五、長祿寛正記
二十六、高祖遺文錄
二十七、御書辨正論
二十八、身延道の記
二十九、蓮永寺舊記
三十、松前法華寺舊記
三十一、津輕法嶺庵記
三十二、貞松日富の記
三十三、小林家々譜
三十四、清正記

- 三十五 北海道寺院沿革誌
- 三十六 蝦夷檢考錄
- 三十七 唐書地誌
- 三十八 行唐縣誌
- 三十九 日露交涉北海道史
- 四十 南京日記
- 四十一 扶桑倫類錄
- 四十二 晶屑載
- 四十三 鷹峯群談
- 四十四 愚案記
- 四十五 錄內啓蒙
- 四十六 錄內扶老

明治四十四年七月十三日印刷
 明治四十四年七月十六日發行

定價金三拾錢

不許複製

著者兼發行者 佐野前勵
 東京市芝區芝二本樓一丁目十五番地

印刷者 畑中爲之助
 東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所 國光印刷株式會社
 東京市京橋區築地二丁目二十二番地

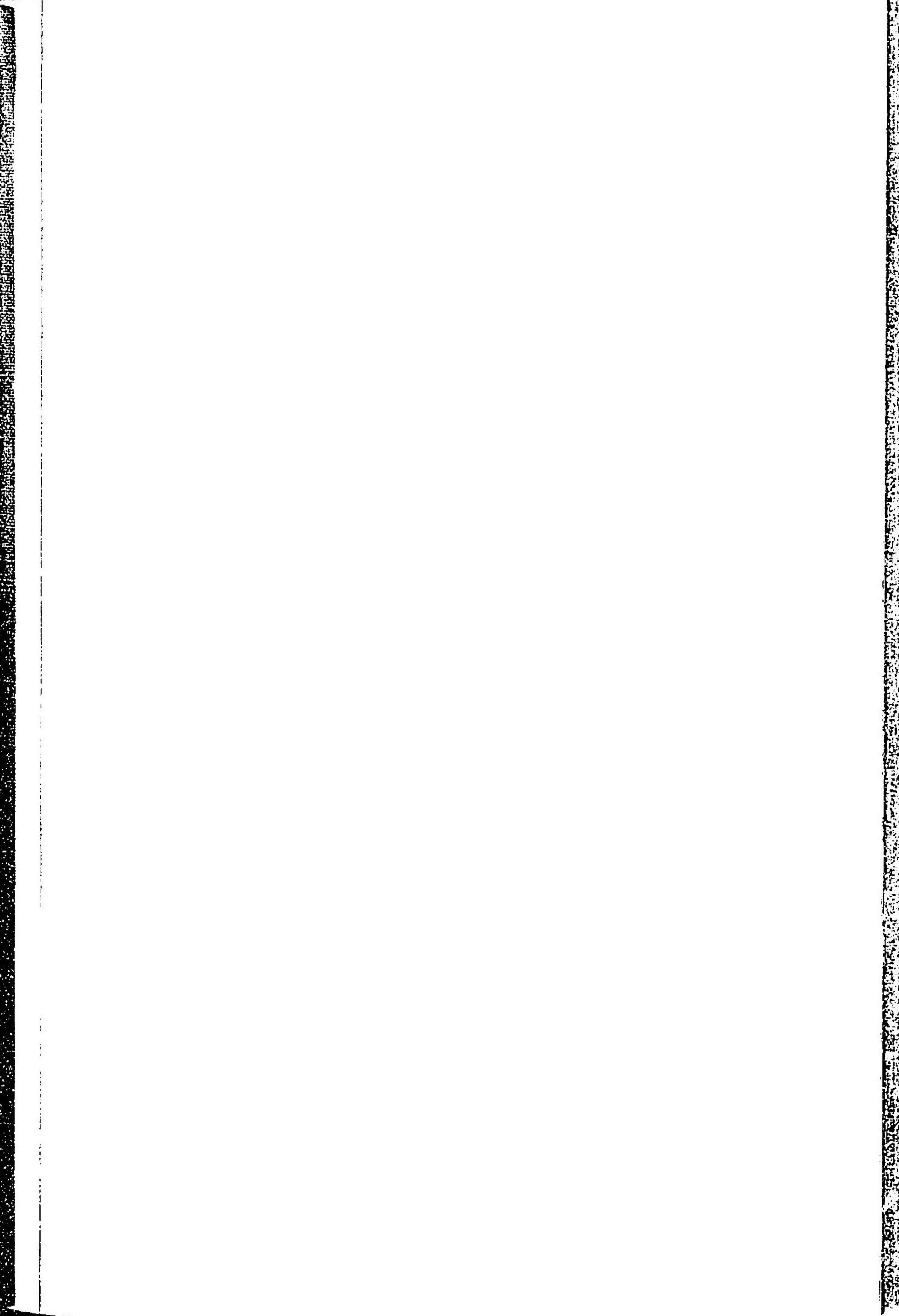
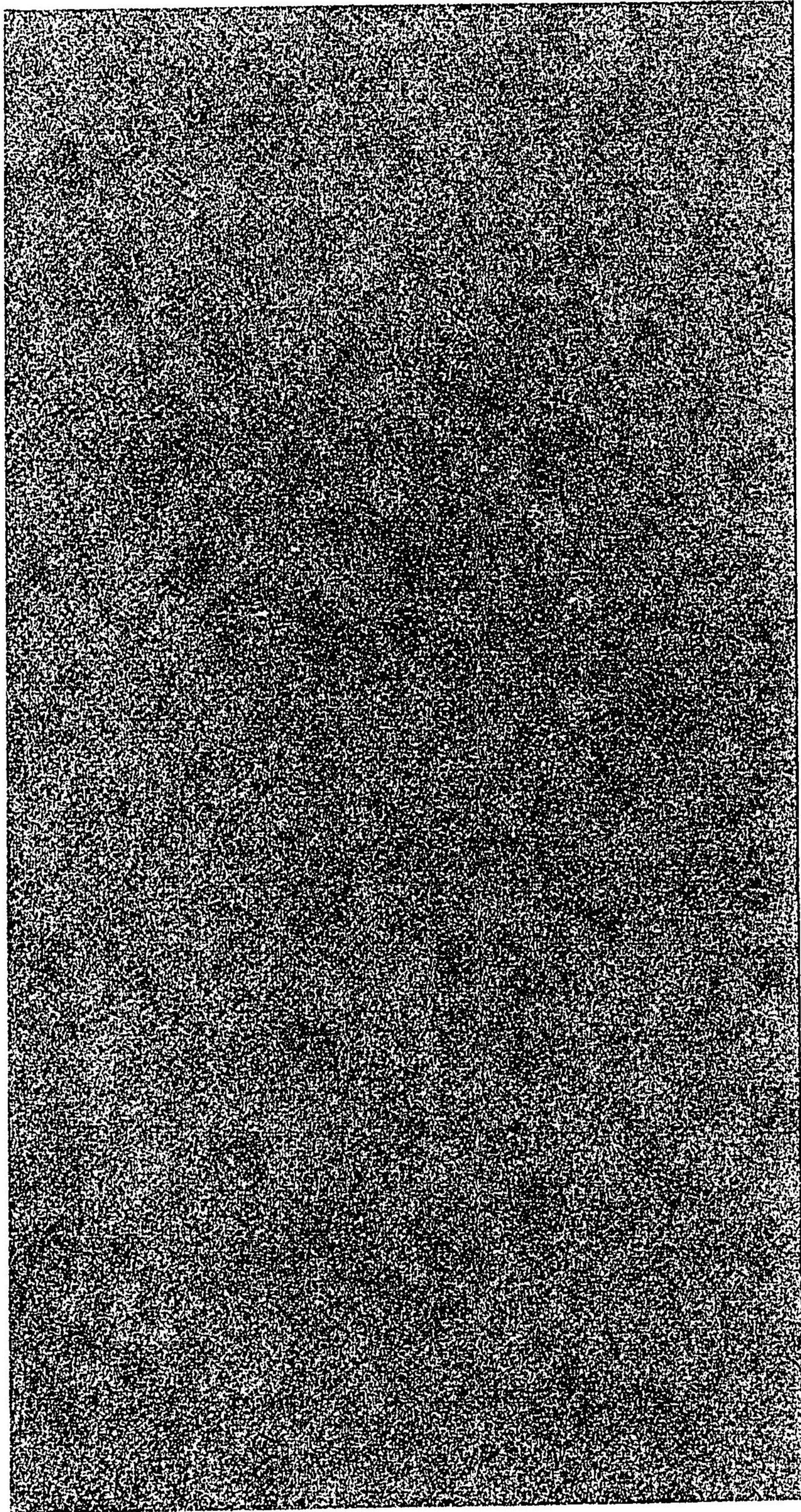
發行所

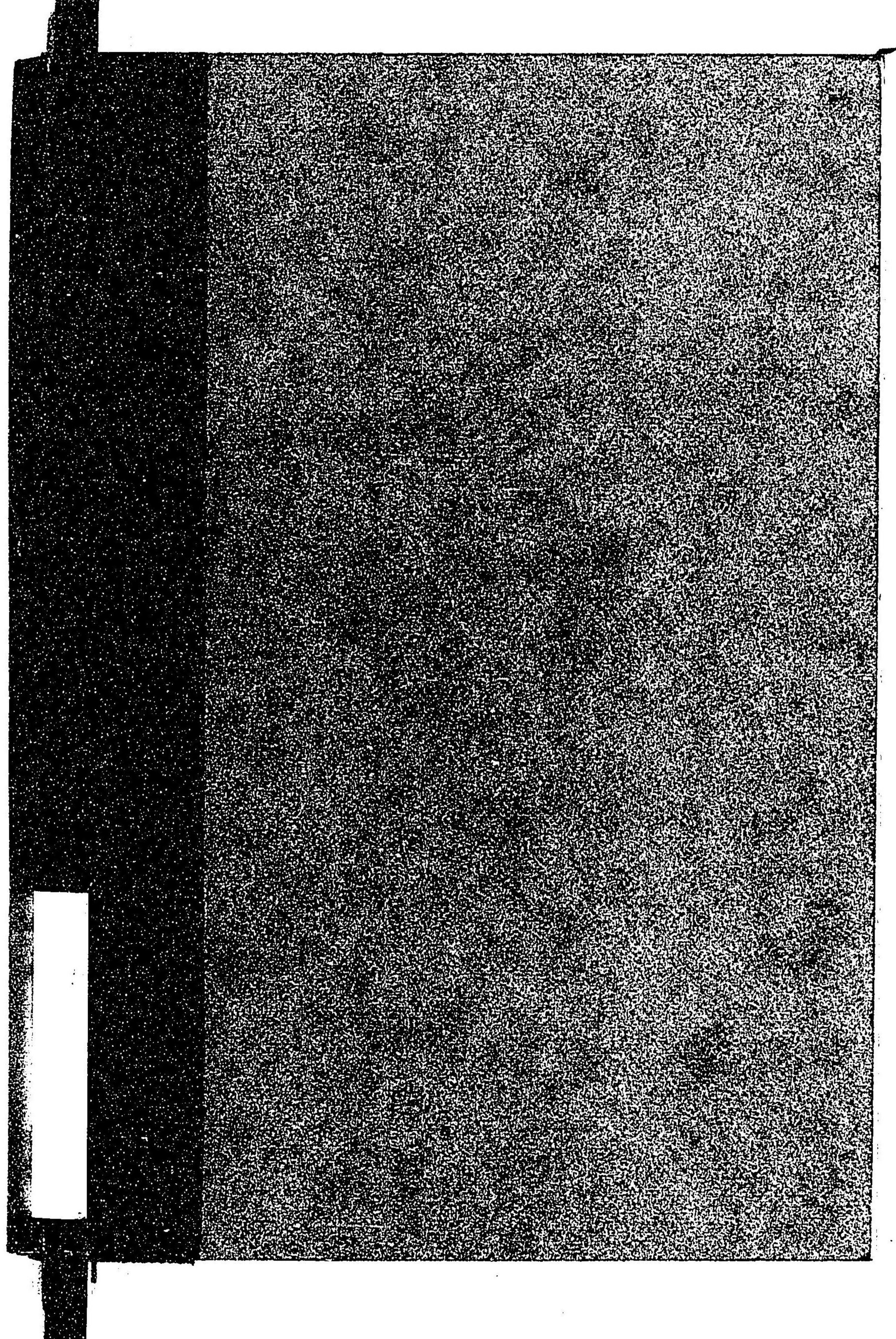
東京市芝區芝二本樓一丁目十五番地

長運寺

824
256

14041





蓮華阿闍黎日持上人

佐野前劬

国立国会図書館

324

256

020196-000-2

324-256

蓮華阿闍黎日持上人

佐野 前劬 / 著

M44.7

ABH-0415



